

2023年6月27日取材

茨城県

産地レポート

ピーマン用台木

JAなめがたしおさい 周年出荷の切り札として、ピーマン用台木 「グランバギー」に期待 (編集部)



地域概況

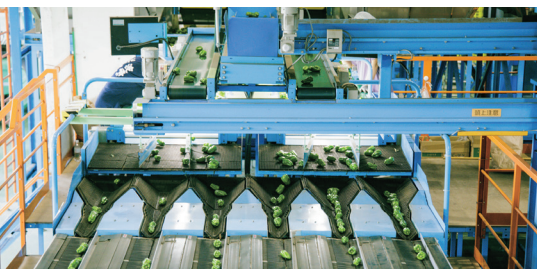
茨城県の東南部に位置しており、行方市、潮来市を管轄区域としていたJAなめがたと、鹿嶋市、神栖市を管轄区域としていたJAしおさいが2019年2月に合併して誕生。その販売高は県内1位を誇る。神栖・波崎地区を中心としてピーマンの出荷量が多い一方、行方・潮来地区はサツマイモやレンコン、ミツバなどを中心し約60品目の多品種栽培を行う。

日本一の夏秋ピーマン産地

JAなめがたしおさいは単一の農協としては最大のピーマンの出荷量を誇り取材した波崎営農経済センター管内の栽培面積は約140haに及びます。その内訳は温室(長期)が約17ha、春物(半促成)が約60ha、秋物(抑制)が約62haとなり、年間出荷量は9800t、販売額50億円の目標を掲げています。取材した波崎地区のピーマン部会の部会員数は194軒で210名が所属しています。

周年出荷の安定のために「グランバギー」に期待

←
左からJAなめがたしおさい波崎営農経済センター販売係の所和希さんと生産者の須之内邦彦さん。



←
2018年の8月に完成した共同選果場の様子。12個の選果レーンがありパート従業員60人が従事。1日平均40t(午前のみ稼働)、最盛期には最大で1日70~80t(午前、午後稼働)を選果する。



↑JAなめがたしおさい波崎営農経済センター副センター長の小松裕司さん。

2期作にもメリット

波崎地区の須之内邦彦さんは連棟ハ

センターの小松裕司副センター長の話によると、産地の課題として黄化えそ病やネコブセンチュウによる収量の低下が長期作が減少している大きな要因だといいます。大型の選果機を周年稼働させるためには、年間を通じて山谷のない出荷が理想です。また、春物から秋物の切り替わりの時期は出荷量が減少します。産地として長期作を維持して連続出荷する必要があります。「グランバギー」が産地を支える切り札となり得るのか何うと「従来の台木品種はセンチュウには強いけど草勢の低下で着果数が実生苗より少なくなっていました。この台木に切り替えてからは実生苗と同じかそれ以上」とのことでした。草勢や葉数が維持され、収量は実生苗と同じかやや多くなったとの評価でした。



↑柱を挟んで左が「グランバギー」の接ぎ木苗、右が実生苗の様子。実生苗とのセンチュウ害の差は明らかで、草勢もほぼ同じ。

ウス7棟、計95a(温室30a、春秋物65a)でピーマンを栽培されています。「グランバギー」の評価について何うと「苗代は実生苗の倍ですが、1回の収穫で苗代は回収できるため、台木を使用するメリットの方が大きいです」とコスト面でも問題がないようです。取材したハウスは1月27日定植の春物のハウス。実生苗と「グランバギー」を使用した接ぎ木苗が柱を挟んで栽培されていました。結果は4月いっぱいまで暖房を切った後、実生苗は5月上旬からセンチュウ害による黄化が始まったのに対し、接ぎ木苗は6月上旬までセンチュウの被害は見られず耐病性の効果も十分だったようです。耐病性に加え、根量が多く栽培後半まで草勢を維持できるうえ、果形の乱れが少なく着果数が低下しにくいことから1割は収量の増加が見込めるのではないかと期待を寄せておられました。